

詩誌

回

生

中
号



目次

【詩】	予言	中村正秋	4
【詩】	放課後	金子忠政	6
【詩】	禁書	金子忠政	7
【詩】	共犯	金子忠政	8
【詩】	赤いポスト	前沢ひとみ	9

【詩】	贈り狼	やまうちあつし	10
	情報短信 (From Koguma)		12
【詩】	ひとり居	秋網まさお	24
【詩】	十月六日について	小熊昭広	26
【詩】	からくり箱	小熊昭広	28

ランダム・メモリー

表紙画
URL : <http://tsurumakidou.xxxxxxxx.jp>
明才

予言 中村正秋

どこからが 始まりで
どこまでが 終わりののか よくわからない

そんな 風景を 見たことがないだろうか

時間が 右から左に流れて

予言が 口から 耳に抜けていくような

始まりから 終わりまで 決められた

時間と場所と言葉の意味と

突然に 変わってしまう 風景

生まれては 消えていく 風景

予言はすでに コンピュータにとって代わられた
データなるものを 足したり引いたり 掛けたり割ったり
捏ね繰り回すことで 作られるようになる

予言は データがなければ 生まれないものに とって代わられた

始まりを求めているのは コンピュータで
終わりを求めているのは 人間で

いつも 何かを求めないといけない世界になってしまったようだ

放課後 金子忠政

教室の半分だけ開いたうしろの扉から
瘦身の女生徒がひっそり入ってきて着席し
うつむいたまま蟬の声を聴く

（昔日の幻想の中で微笑みを忘れる老婆のように見える）

廊下の向こうから電話の音がしているが誰も出ない

やがて、その低い音は止み

全身で浴びるように背をまるめ

彼女は、聴いている

蟬が一層激しく鳴きはじめた

風にのってやってくる森のざわめきが
せわしなく枝をわたる鳥たちよりも
強くのたうつようにも聞こえた

焚書 金子忠政

紙の本を

澄んだ空気に

パタパタ震わせ

おとしめる言葉を探し

頁を破りつくすため

語りきろうと

思いを切り、……

はるか遠方、

砂埃にかすむ僧院の悲劇を

わくわく切り崩す

共犯 金子忠政

涙で濡れた手で静けさにふれる
共犯者を見つけようとするのだが
そこらじゅうの共犯者の一人ではない
空気だけが小賢しく演出をほどこしている
そろそろ例の悪事が計画されつつあるというのに
たたみかけてくる詩という塵芥にむせかえる
歪形、歪形、歪形、の塵ども
それらみな、差のなかに配置されてしまつて
それゆえ、みな、空気の中にすましていられる
おしまいへのふりきり方を言うために
きめるときはきめる、などと空言を垂れ流し
そがれる、そがれる

すべて反故にし
骨がらみにかかずらつてみよ！

赤いポスト 前沢ひとみ

大量の思い出と苦痛があつたが
入り切らなかつた

そぼ降る雨と
内腿をぬらす涙と
激情もあつたが

駅の前に立つ
赤いポストには
入り切らなかつた。

贈り狼

やまうちあつし

僕は途方に暮れている
渡したいものがあるけれど

今日は誕生日でも

記念日でもない

項垂れるむこうに

ぽっかり浮かぶ

満月

頭を上げると

狼の顔

こんなきれいなつきよなら

なにかとどけるりゆうにたりる

きみにおくろう

はなたば

ししゅう

はちのす

○

くだもの
けだものだけど
にんげんだもの
なんでもおくる
なんでもおくれ
なんでも
かんでも
いいかい
噛んでも
きみのからだも
きみのころも
きみもしろみも
キミシニタマフコトナカレ
獣の右手から
マネキンの左手へ
リボンをつけた銀の銃弾
紅茶を淹れて待ってておくれ
ほろぼしてくれ
ほほえんでくれ

情報短信 (from Koguma)

- ▲2016.12.04 茅ヶ崎の帽子店で冬の帽子をあつらえる。頭の寸法が小さな私は、奇妙なことになる。夜、伯父の通夜。久しぶりに会う従兄弟が大勢いたが、どうも居心地が悪い。
- ▲2016.12.05 朝、両国橋周辺を走る。昼、葬儀を終える。帰り、活字店に寄り、文章にルビを振るための相談。五号活字には七号活字でルビを振ると教えていただく。五号四分と一ポイントの金属インテルをいただく。七号活字は、必要の都度送ってもらうことにする。
- ▲2016.12.09 句帳のあとがきと奥付の印刷。
- ▲2016.12.10 喫茶ホルンのショップカードの印刷。アダナの HHS (通称パイパー) は小さな亜鉛版の印刷に使えることを確認。
- ▲2016.12.17 午前、句帳の表紙の裁断作業。午後、世話になった方の家に行き、亡くなった奥様に線香をあげる。昔の同僚と久しぶりに会い、送別会の段取り。『木槿通信』第五三号と第五四号拝受。
- ▲2016.12.18 句帳の仮綴。
- ▲2016.12.09 文化横丁の「源氏」で軽く飲んで帰る。
- ▲2016.12.22 自分は、度胸のない人間だといくづく思う。
- ▲2016.12.23 賀状の印刷。
- ▲2016.12.25 大した用もないので適当に過ごす。
- ▲2016.12.27 仙台へ行くと思ったが、気が失せる。
- ▲2016.12.28 三人で飲む。酩酊。これによって、年末は、ほぼ無為に過ごすことになる。
- ▲2016.12.29 『洪水』第十九号、仙台演劇研究会の通信誌『ACT』拝受。ついで、送られてくるが、久しく真剣に読んでいない。
- ▲2017.01.01 句帳の編綴。
- ▲2017.01.03 詩誌の校正を仙台の喫茶店で行う。帰り、山元町の復興住宅に入居している叔父宅に寄る。駐車場が広い。気に入っていた軽いレインコートを無くす。
- ▲2017.01.05 平芳幸浩『マルセル・デュシャンとアメリカ』戦後アメリカ

- ▲2017.01.30 三月の読書会のチラシづくり開始。案を作り、パネリストにメールを送る。
- ▲2017.02.02 所用で岡山。電車の中で詩誌の校正。自分の作品をかなり手直す。
- ▲2017.02.03 アートスペース油亀に行き、珈琲の器展を見る、楽し。ここで行われる夜の珈琲豆のブレンドづくりのワークショップに参加ことにする。それから、近くの本屋「一冊の本やから」に行く。お母さん向けの店。京都にある book & things 的な店。絵本とオーガニックと生活の知恵の本が座敷の上に沢山ある。その隣の自然食品を使った店「まみばんストア」で（これも同じ古民家的な建物の中）で昼食とする。夜、岡山駅で桃太郎の祭りずしを買い、アートスペース油亀を再び訪れる。木下商店のオーナーの方の指導の下に、ブレンド珈琲豆づくりの学習。足し算、引き算、かけ算という言葉。かけ算は難しいらしい。DRIPPERS の豆（コスタリカ）買う。
- ▲2017.02.05 詩誌『a's』第三九号と詩誌『葦』第五二号。
- ▲2017.02.06 THT/DRIPPERS の珈琲を淹れる。美味。
- ▲2017.02.08 詩誌の最終校正。終わり、印刷所へ入稿。帰宅後、ギリユ一ワインで寝る。発注した読書会のチラシが届く、中味は確認せず。
- ▲2017.02.11 未明、日記の製造。それ終わり、明るくなってマルの散歩、最近「と」になってきている。
- ▲2017.02.12 らわきサンシャインマラソン。午前九時スタート、ゆっくりと焦らずに走り始める。二十キロ過ぎても足は動いているが、右の太股の付け根辺りを中心に違和感が出てくる。でも、走りには影響ない。二六、七キロ付近で足が動かなくなるも、自分のペースで我慢すると、結構、持続できた。それで三五キロ過ぎまで持ったが、それからが足が（特に右足の太股）やはり動かなくなる。そこで、わざと足を上げて大きく走ると結構続けることがまたできる。キロ六分三十秒位の気持ち、最後の二キロは立ち止まること二回、やっとゴール。五時間を切る、嬉し。

- ▲2017.02.13 マーク・ルイソン『ザ・ビートルズ史（上）』（河出書房新社）（翻訳：吉野由樹、山川真理、松田ようこ）を読み始める。果たして、図

カ美術の進展とデュシャン受容の変遷」（ナカニシヤ出版）を読み続けている。私が詩というようなものを意識し始めたときの、なにやらが埋もれているような気配がこの本からしてくる。それで、どうも途中放棄できずに、ずるずると読み続けている。

- ▲2017.01.17 家族揃って河原でマルと散歩。活きよい良く車から飛び出したので、自分も一緒に走ったらマルが足に飛びついてきて二人で転ぶ。マルの足に私の体重がのつたらしく、マル跛行する。
- ▲2017.01.08 詩誌『虚の筏』届くも、最後まで読める詩はなし。送っていただき、申し訳なく思う。
- ▲2017.01.10 デュシャンの本読了。書籍の通読は久しぶり。
- ▲2017.01.18 未明、三月に開催するシンポジウムの企画書となるメモをつくり、演者にメールを打つ。夜、返信あり、狙ったイメージと重ならないが、「人間の尊厳」については至極納得。
- ▲2017.01.19 読書会に来ていただいたことのある たかはしさとみ女史の運営しているアトリエの展覧会を仙台にある「ギャラリーJ」に見に行く。いわゆる知的に障害のある子供の絵画教室の作品展。作品「東西線」と「白い時計」が気になった。彼女としはし雑談、楽し。
- ▲2017.01.21 読書会の案内状の作成。文選、組版、印刷すべて順調にゆく。狸森焙煎所の珈琲豆を定期的に送っていただけのこととなる、嬉し。
- ▲2017.01.22 午後、畑仕事。ほうれん草を全部抜いて、土起こし作業。このところ、夜にはマラーの評伝を読んでいるのだが、彼の文章の美的なうぬぼれがとても気持ちよい（変態…）。
- ▲2017.01.24 忘れ物はかりしている。
- ▲2017.01.24 薬屋のおじさんから電話あり、嬉し。
- ▲2017.01.28 朝食後、活字の整理。外字を部首順に並べ直し、活字棚に納める。終日かかる。
- ▲2017.01.29 午後、読書会。小笠原ひろみ氏「サトウハチローと仙台」。学術的というよりも、人の繋がりを次々と辿ってゆく作業、面白いだろうな。人に共感を呼ぶ言葉を届けることは、本当のこと（自分が思っていること）は（敢えて）隠す（秘密にする）。自分を追い込むかのように罪を作る。

- 書館の貸し出し期限内にこんな分厚い本を上下二巻読めるのだろうか。移民、宗教、貧困、家族の概念、みんな一緒にくだ。
- ▲2017.02.14 帰還して、飲む酒がないので、甘いリキユールを氷で割って飲む（こんな飲み方はすべきではない）。チョコレートも大量に食べる。気分が悪くなる。
- ▲2017.02.17 仙台の駅前にある喫茶店「青山文庫」に初めて入る。若い女の子で店は満員で驚く。中は今風のゼンマイロボットが働いているようにで整然としている。コーヒーは、醒めると味が落ちる。日本酒少々で寝る。今日も、ビートルズ。寝際に、瀬川昌久『自選著作集 1964-2014』：チャイリー・パークーとビッグバンドと私』（河出書房新社）。クロード・ソーンヒル楽団のことを認識。
- ▲2017.02.18 午後前、出立。ファイルメーカーのカンファレンスのようなものに参加。あまり実りはない。iPad と Apple TV を使って Apple Play でプレゼンする方法を知る。
- ▲2017.02.19 朝のマルの散歩の途中で珈琲豆の焙煎所をに遭遇。その後、久しぶりに隣町の蔵の喫茶店『蔵人』に行く。置いてあった雑誌『東北民俗』で「柳田国男と仙台」を読む、面白い。柳田国男の娘の旦那の堀一郎は、仙台に住んでいた時期があったのだった。詩誌を置かせていただく。次に、珈琲豆を買いに朝に見つけた店（ジャンゴ・ビーンズ）に行く。深煎りはしていないとのこと。早速、昼食後に飲むも、あまりぴんとこない味。抽出方法を変えるところかな？選択肢から外すのはまだ早いかな。午後、かつて同僚だった方の退職を祝う会。考えることあり。
- ▲2017.02.26 多分この日、風呂で転倒する。右膝の脇を強く打つ。
- ▲2017.03.04 読書会、やっと午前十時過ぎに準備に取りかかる。テーマに沿った内容にはならなかったと思う。狙いどおりにはなかなかない。自己嫌悪が続く、妻にきつい一撃を喰らう。講師、パネリストには感謝するしかない。

- ▲2017.03.07 瀬尾雅弘『フレンチポップス・シックスティーズ イエ・イエと称されるムーヴメントをめぐる』（フィギュール彩）を読む。
- ▲2017.03.12 個人誌の文選作業。午前七時までに終わらす（約二時間）。

それから、マルの散歩、今日は利口。朝食後、午前九時三十分頃から組版。行三六文字で（天三文字、地二文字は締めつけ用のクワタで押さえるので捨て駒とする、実質三二文字）。午前でなんとか試し刷りと見当を終える。結構、テキンの調整に時間を要するも、午後、一氣に印刷。五版を印刷。「ち」と「や」を間違う。結構きつい失敗。ルビは荒技を使ってしまったが上出来。午後六時に一切を終える。

▲20170315 夜、ある方の慰労会。不適切なことがいくつもあり、落ち込み、眠られず。

▲20170318 妻と盛岡。ホテル近くの蕎麦屋「かしわや」でもり（大盛り）と日本酒冷や。喫茶店「六月の鹿」とcsgへ。

▲20170319 光原社へ。いまの焙煎道具を買う。それに、民具のスタンブ（葉の模様）。喫茶店で珈琲を飲むも、異常なほどの時間待たされる。その間、幼なじみからメールあり、夜会うことになる。夜、仙台で酒の席。エスバルの中の「松島」で飲む。顔見知りの店長と雑話。

▲20170321 『欧文組版 組版の基礎とマナー』（タイポグラフィの基本BOOK）高岡昌生（著）、高岡重蔵（監修・監修）（美術出版社）は面白い。▲20170326 未明。次の号の個人誌の編集、欠番したことを知る（アホ）。さほど進まず。マルと散歩。朝食後、個人誌の編集。堆肥、肥料等、生豆を買う。畑仕事、梅の花が五、六輪開花。ジャガイモの種を植える。越冬した人参とプロコリーアの収穫。

▲20170401 未明。活字の整理等（データーベースの更新等）。雨中でマルの散歩。朝食後、正誤表の印刷。テキンの調整がけっこううまくゆく。嬉し。午前十一時には終わる。それから、郵便局。『木権通信』拝受。午後、個人誌の製本に集中。やっと二部完成（正誤表入り）。▲20170402 午後、句会の案内状の文選→組版→印刷。そして完成。五号活字を中心に、二十ボ、二号、七号で構成。

▲20170405 未明。句会の案内状の解版。夜、梅酒で食す。即寝。本木昌治の本を読む。このところ、寝起きが早い、身体が持たないかもしれない。▲20170405 未明。句帳の棚付け。それ終わり、走る。久しぶりに座禅に繁昌院へ行くも、京都が桜の季節故、今日は中止（重鎮がそっちに行っ

もう一つは『フレンチポップス・シックスティーンズ イエ・イエと称されるムーブメントをめぐって』（瀬尾雅弘著、二〇一七年二月二十日彩流社刊）です。

『ザ・ビートルズ史（上下）』については、かなり話題になっていた本なので、読まれた方も多いかと思いますが。私は、これまでビートルズに特別に興味を持つことはありませんでした。解散前のビートルズについては、その存在をテレビのコマーシャルに映る映像とともに、僅かに時代を共有していますが、当時、小学入学前だった自分にとって、その映像は微かに記憶している程度です。その後も、音楽への興味は人並みに持ちましたが、ビートルズの音楽は、他のミュージシャン、例えばシルビー・バルタンとかミッシェル・ボルナレフなどの、自分にとってみれば時の流れと共に色褪せてゆく流行の一つに過ぎませんでした。ただし、一度聴いたら（何度も聞かせられたこともあるかもしれませんが、忘れられないメロディーや音の響きをとった、他のミュージシャンには感じるものができないものが、そこにはある、それも数多くの楽曲と共に、とはならないに思っていたのです。しかし、それが何なのかレコードを買ってまでして掘り下げること（楽しむこと）はありませんでした。そして、この本を読んだきっかけも、この異常に分厚い本にいったい何が書かれているのか、そんなに書くことがあるのか、ビートルズの歴史的な評価は高くても、ただか音楽の一つのユニットのことにこれだけの文字量を費やして何が書かれているのか興味をもったということでした。

とても刺激的で面白かった本です。他の方の書評や感想として、長い文章なので相当にマニアックなビートルズファンでなければ読み通せないと思われているものを目にしますが、けっしてそんなことはなく、ビートルズに興味があれば誰でも面白く読み通せる本だと思います。

では、なにが面白かったかというと、第二次世界大戦が終わる、世の中に活気が戻りつつあった時代に、まだ身分階級に縛られた慣習や生き方が根強く残っている中、また徴兵制という自由を権力の力で縛ることが当然とされていた中、しかし世の中は、戦勝国アメリカの、かつては破廉恥と軽蔑されるような、エルビス・プレスリーに代表される激しい音楽がラジ

で不在故。高岡重蔵、平本正子『初心者のための欧文組版とその設備 1〜5』（印刷学会出版部、一九七六年）届く、面白い。欧文活字での商売を始めるにあたっての指南書。私にとっては、目から鱗のありがたい技術書だ。

▲20170406 未明。このころ、言葉遊びばかりしている。高岡重蔵、平本正子『初心者のための欧文組版とその設備 1〜5』は本当に面白い。カップブレートゴシックの活字探しに終始する。燕が我が家の巣にやってくる。いつもよりかなり早い。

▲20170407 庭のレンギョウ開花、梅が満開となる。

▲20170408 午後、欧文活字（モダン・クラシック）二フォントセット届く、少々戸惑い有り。金沢のユニビオの店主より御札の活版印刷の葉書届く、デザインとしての活版印刷を彼女は追求している。しかし、面白いのは、今、主流となっているイラストを描いて亜鉛版で印刷するイラスト的なデザインではなく、古い活字を組み合わせて、古民家再生的な新しい感覚のデザインを創造している。そこが、凄いなと思う。私は、あくまで本を作るための活版印刷という姿勢だが、それを突き詰めてゆくと、何も活版印刷ではなければいけないという理由が消えてゆく。高岡重蔵『複製版 活版印刷』（印刷学会出版部 届く、かなり小さな本、でも美品、書いてある内容はさほど新鮮みはない。夜、なんとなく寝る。詩誌『霧笛』第二二二号拝受。

●二〇一一年ほど、他人が書いた詩に対する自分の感想を書くこと、詩による表現を読み解くこと、又は感じたことを言葉にすることに興味を失っているのですが（こういうことを書いている時点で、また書けるのではないかと考えている自分がいます）、しかし、詩に限らずに、自分の感じたことを、ある程度のもたまりのある文章に書き留めておきたいという意欲は失っていませんでした。

そこで、最近、少し考えさせられる音楽に関する本に出逢ったので、感じたことを書きたいと思います。

一つは『ザ・ビートルズ史（上下）』（マーク・ルイソン著、山川真理・吉野由樹・松田より子訳、二〇一六年十一月二十日河出書房新社刊）です。

オから流れ始める。それに反応して、遠くイギリスの十代の中・後半の年齢の若者達が、これまでの慣習に反抗的で破壊的な行為・表現に魅せられて、自分も行動しようとして破壊と創造の試行錯誤の生き方をとる。その姿や過程を手取るように見ることができたことが面白かったということでした。

瀬尾雅弘氏の著作『フレンチポップス・シックスティーンズ イエ・イエと称されるムーブメントをめぐって』は、イギリスにおけるアメリカのリズム&ブルースから派生した新しい音楽の受容が、フランスではどうであったか、そしてその音楽の詳細なデータをまとめたためたものである。



この本の後書きで、瀬尾氏は「本書は、モノを言う権利がなかった若たち」が音楽表現でモノ申すようになっていく六十年代の音楽動向に焦点を当てたものであるが、社会参加の年齢となつて問題意識も抱く若者の思いを反映させた楽曲が共感を得て大衆化していく当時のフランスの音楽に耳を傾けると、政治的・社会的な信条のスローガンめいた言説のみでは捉えきれない生身の人の心情のありようがまざまざと伝わってくる。」と書いています。

「生身の人の心情のありよう」という言葉は、本書を読むと、かなり解りづらいものと感じるのですが、さらにそれがハイエイエという現象と書かれると、なんととはなくフランスのオシャレっぽいイメージが頭から離れないのですが、瀬尾氏は一貫して前者『polareport—ミッシェル・ボルナレフ挑戦と変遷のレポート』（二〇一〇年八月・愛育社刊）で書いているように、フレンチポップスはいわゆるフランスのおすまししたファッションではなく、生身の人間の肉声が聞こえてくる、言い換えればごくありふれた巷の人間の生き様が自分の自分に対する反証のように響く音楽であると主張しています。

それは、この本の表紙裏に、「日本の各媒体でも「イエイエ」の語は目にすれど、その内実がハッキリと捉えられないまま、語感から何かへ浮かれた楽曲」がフランスで流行った時期を指し示す程度の語として……（後）略」と書かれていることから著者の意図がわかります。

イギリスでは、ビートルズがデビューする直前に徴兵制が終わります。若者達が大人達、社会にモノ言うことが、アルジェリアの独立闘争のまっただ中にあり、徴兵制が依然として存在していたフランスよりも早かったと思います。また、言語が同じだったことから、アメリカの音楽の受容はより直接的だったと思います。その違いは、へ浮かれた楽曲」で捉えられるように、かなり大きいのではないかと思います。

一九六〇年代の若者の音楽を社会現象として捉えた場合に、とても面白い示唆に富んだ二冊の本ではないかと思っています。

最後に、これも本からの引用になりますが、『ザ・ビートルズ史』の下巻に、ジョン・レノンとポール・マッカートニーが一九六一年十月にパリを訪れたときの記述があります。

「一九五六年、アメリカでロックンロール・ブームが巻き起こったが、ここフランスではほとんど影響を受けていない。しよせん外国の言葉で歌われた外国の歌だったのだ。ところが、一九六一年春になるとフランス人の歌うロックが爆発的な人気を博し、パリの街なかでも劇場でも聴かれるようになった。しかし、アメリカやイギリスと同じように、フランスでもブームの到来にともなって少年非行が増えるという汚点が付いてしまった。ジョンはビートルに住むビートルズファンに宛てた葉書の中で、次のように書いている。「パリは素晴らしいよ。ただ、ロックがないのが寂しいね（フレンチ・ロックなんていう安っぽい音楽ならあるけれどさ）」。

「安っぽい音楽」とは、片方から見た視点であって、全く否定するものではない。このときジョン・レノンは、ジョニー・アリディやヴィンス・テイラーの音楽を見て聴いている。むしろ、否定することからもっと先に進んで、イギリスとフランスの若者の音楽を通じた表現の対比に興味を進めてゆくと、さらに面白いことになるような気がします。

▼2017/04/09 午前、句帳の棚組。二人分を終え、休憩。午後、一昨日届

壁」という作品です。この作品の第五連を引用させていただきます。

岸壁にはまだぬくもりが残っていた
あたたかな風が
船体に巻き付くように吹いていた

詩「岸壁」第五連

作品の全体が見えない中で、強引に説明なしに私が印象に残った言葉を書くと、この第五連の「あたたかな風」という言葉です。

このへあたたかな風」とは、どんな風なのだろう、どうしてあたたかいのだろう、誰があたたかく感じているのだろう、作者なのだろうか、いや岸壁なのだろうかというふうに、想像を膨らませてくれる言葉です。

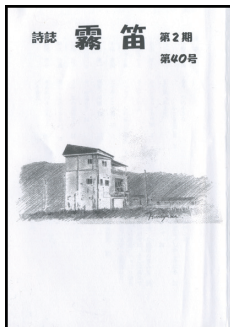
もっと、違う言い方をすれば、作品全体から見ると突飛な表現に感じたのです。へあたたかな風」とはどんな風なのか、というふうに私にとつては戸惑う言葉なのです。その朝霧のような困惑を取り去るかのよう、作者は幾つかの情景を作品の中で描いています。情景を描く、それも気仙沼の情景を描くことは、処女詩集から西条氏の詩に一貫していることです。

第一連では、「岸壁では」「今は穏やかな湾内で／疲れた船体を休めている」。第二連では、「岸壁は」「力尽きた漁船を／出船までの休息を／荒海から守っていた」。そして第四連では、「岸壁から」「船体の色を新しく塗り直して／大漁旗を掲げてまた漁場へ出て行った」。そこにあたたかな風が吹いているのです。

しかし、海のない町に住んでいる私にとって、漁船の往来とへあたたかな風」とは結びつきません。春のように心地よい季節感のある表現なのですが、私には季節と情景とを結びつけて感じることはできないのです。また、漁船の船出というものは悲しい分かれが存在しているものだという先入観があります。要は、岸壁にあたたかな風が吹くという表現には、生活感を私は持てないのです。だから、この吹いている風が「あたたかな」と感じている人は誰でも、どうして風があたたかいと感じることができるのだ

いた欧文字の整理（すだれに納める）。夕、ノラ・ジョーンズのコンサートへ息子と出かける。ジャズボーカルのことを考える。彼女はやはり、声を器楽的に使うのが上手。遅く帰宅。

▼2017/04/10 義父の歌集第二弾（「挽歌」）の、手書きの原著の草書体の読み下しを始める。



●詩誌「霧笛」が届きました。しばらくぶりに何か書きたくまりました。それで、今、手にとって、ぱらぱらとページを捲っています。ここ数年の間に、詩に対する私の考えは、かなり変わったような気がしています。それは、詩とは何かという定義を考えていたということではありません。自分で自分のことを言葉で説明するのは難しいのですが、例えば、詩は瞬間に気分を発症するものと捉えてみたり、詩の言葉自体に興味がなくなったのに詩のようなものを書き続けていたり、言葉を文字という物質に置き換えてみたり、そういう思考や行為の錯誤を続ける中で、気がついてみると以前とは違った感覚を言葉に持っているかのような状態が続いているということです。

【注】実は、昨日届いたのは詩誌「霧笛」第二十二号でした。

それを読み返えそうと思ったら、手に取っていたのは第二期四十号だったということでした。

ですから、詩誌「霧笛」に対する私の感じ方も、以前とは違ってきていると思います。しかし、詩誌「霧笛」の書き手は、それほど変わっていないのですから、結局は私の書くことは、さほど以前のものとは変わらないものになるのは、不思議ではないのです。その意味で言えば、私はさほど変わっていないことになります。

今回の詩誌「霧笛」第二期四十号で印象的な作品は、西城健一氏の「岸

ろうかと思うのです。

そこで改めて、この作品の冒頭に戻ると、先ほど書いた第一連以降の記述に再び出逢うということになります。そしてその瞬間に、私の戸惑いは消えるのですが、果たしてそれはこの詩を私が理解したということ、感じ取ったということになるのでしょうか。

多分、私はこの詩を理解はしていないし、感じ取ってもいないのだと思います。それは、詩とは理解するものでもないし、感じるものでもないでもないと思うからです。

▼2017/04/15 音楽のライブを聴くのは、約一年前のポップ・デュラン以来。ジャズのライブとなると、もう昨年の一月のブルーノートのマイケル・チャンズまで遡ってしまふ。

ノラ・ジョーンズは私の中では、ジャズミュージシャンではない。そもそも、今、ジャズボーカルは、骨董趣味みたいなものであると感じている。断定をする気持ちは毛頭ないが、従来の形式を踏襲しない（簡単に言えば、ジャズバンドが奏でる音を背負わないような）ジャズボーカルを、今以てついぞ見い出せないでいる。

これまで、触手が動いた人はいらる。

例えば、マデリン・ペル、リズ・ライト、パトリシア・パーバーなど、でも結局はジャズ・ボーカルの枠を超えてしまひ、ジャズではなくなっていると感じて、それ以上聴く気力を失ってしまった。パトリシア・

パーバーは、そうではないのだが、結局、スタンダードナンバーをメインにおかないと、客は喜ばない状況が続く。

では、現代におけるジャズ・ボーカルってなんだろうということになるのですが、私には分からない。



理屈ではなく、感じるものなのだろう。

今、ジャズ・ボーカルといわれているものは、いわゆるスタンダードナンバーを歌い上げることとは等しいと思っている。それは、ある面、需要と供給のバランスの上で成り立ってできた結果だと思うのだが、ジャズが持つ破壊と創造という面と相反する部分では、私はまったく物足りないと思っている。結局、違う一面において、安定を、休息を求めることとイコールジャズとなってしまうている。

それも、「あり」でよいのだが。そして、自分が歳を取るにしたがって、ゆったりとした気分になりたいときには、とても重宝する音楽なのだが、・・・やはり、それでは物足りない。

ノラ・ジョーンズのコンサートでは、冒頭、彼女のピアノと、他にギターとドラムのトリオ演奏で、オーソドックスなジャズボーカルを披露した。これには、正直、面食らってしまったのです。正直、素敵です。

ここで言うジャズ・ボーカルとは、音声を器楽的にコントロールする技術と、ワード（言葉）に自在に想いを込める即興性ということになる。それも器楽的だけではない（アル・ジャロウやベティ・カーターとは違うという意味です）、感情を言葉に込めた情感溢れる表現が感じられるということになる。その意味では、ノラ・ジョーンズはジャズボーカリストと言っても十分に通用する。

中盤の独りでの弾き語りは圧巻だった。そうは言っても、その素晴らしい表現力に、マスメディアが放っておかないのか、それともノラ・ジョーンズ自身が狭い世界に収まることをよしとしないのかわからないが、現状はポピュラーミュージックに安易に傾いてきている気がする。大衆性を獲得することは実利的には当たり前なことなのだろうが、ジャズボーカルにおける即興表現を如何に現代のジャズにおいて創り出すかという点においては全く物足りない。

オーソドックスという点では、なんら進化は見られないが、先に書いた、休息と安寧を求めた場合には、今のノラ・ジョーンズには文句がないということになる。

ジャズ・ボーカルにおいて新しい試みを行おうとすると、必然、他のジ

楽譜が用意されて演奏されているものではなく、すべてが場のイメージを持たずに、演奏者自身の中にある世界の中の刺激において、即興で演奏され、録音されているものという確信があった。

yumbo の『鬼火』（ep. レーベル、epcd 092/3）を聴いていて、そんなことが頭を過ぎった。自分は、ほとんど聴いてはいなかったが、初期のyumbo においては、△破壊▽という行為がかなり重要だったと私は思っている。遠い昔に電力ホールのグリーンプラザに流れていた音は、そういうものとは全く違ったものであった。

音楽の形態は違うのではあるが、今の yumbo は、電力ホールのグリーンプラザで聴いたピアノソロに近い音楽ではなかつたと思う。私は、yumbo の音楽をかなり断片的に、しかも意図的に聴いているので、理解者ではない。だから、言い切る自信は全くないのだが、ステレオタイプに言えば、芸術が破壊と創造という相反する行為の繰り返し、またはその両方を同時に持った行為であるとすれば、yumbo のこれまでの変遷はそういうものであったと思う。と、同時に今もそれは続いていると考える。

例えば、詩誌『回生』第1号（二〇一一年一月一日発行）に掲載された澁谷浩次氏の「かなしきマグロ（イントロ）」の第二連の後半を引用させていただく。

わたしもまた
回り続ける車輪となつて
あなたの轍で血を流し尽くしたマグロだ
今やひとつひとつの街から静かに火が消えて
何も残らなくなつたとしても
ある過酷な利那だけは居残り続ける
いくら回遊しても割りきれない
分解されることのない痛みというものが
取り返しのつかない苦味がある
床を無くしたダンサーのように
身をくねらせて

ヤンルの音楽の影響を排除できない状況がある。ノラ・ジョーンズ、マデリン・ペルーなどのように、フォークやカントリー的な要素が入ってくる。これは、仕方がないと思うが、そこに矛盾があるのではないかと感じる。

簡単に言えば、アン・バートンが今の時代に『ブルー・バートン』でデビューしたとすると、全く違った次回作が出されて、プロデューサーもクレイグ・ストリートが起用されるといった現象が起きるのではないだろうか。

▼2017/04/17 庭のレンギョウが散り始める。梅の花もすべて落下する。

▼2017/04/18 義父の歌集の棚組作業。

▼2017/04/22 句帳の本文となる紙の裁断作業。『弘前詩塾』No.29 届く。

▼2017/04/23 午後、句帳の印刷開始。午後六時に終了。版を七回替え、その都度誤植を確認し、ならし木で揃え、印刷をする。ルビ付けで少々難儀する。テキンの癖が分かってきた。今日はまったく調整をせず、胴張りの厚紙を一枚薄くする。



● かつて、電力ホールのグリーンプラザで yumbo の澁谷浩次氏が何かのイベントを行った。詳細は忘れたが、あの人が雑多に行き交うビルの中のエントランスにできた停留している空間に彼のピアノソロの音楽が流れていた。それが、私が彼の音楽と出逢った最初であった。

あの頃、私はキース・ジャレットの初期のソロピアノを聴いていたし、ポール・ブレイのピアノソロ作品『オープン・トゥー・ラブ』も聴いていたと思う。私にとって、その頃、ピアノソロの音楽は、それらとイコールであった。流れていた音楽の印象としては、ポール・ブレイのそれに近いとは思ったが、意外に穏やかなものであった。環境音楽と言ってもよい癒やしを伴った音であった。開放された公共の空間に、違和感なく溶け込んでいたことが、今からすると不思議だった。しかし、意図的にそういう場に合った音楽を作ったというよりも、その演奏は、事前に

今度はわたしがあなたを放る番だ

あなたはわたしの、忘れ難く寒々しい末尾だから

ザクロのように、赤く裂けた夜明けが来る

サーフィンはまだ終わりで

マグロをお食べよ

「かなしきマグロ（イントロ）」最後の十六行

『鬼火』（ep. レーベル、epcd 092/3）に納められている曲「悲しきマグロ Sad Tuna」の前振りにあたる言葉達である。『鬼火』に納められている「悲しきマグロ」の言葉は、回遊を終え、切り裂かれて形を無くしたザクロのようなマグロを食べる言葉達である。よく考えると、ユーモラスではあるが、残酷である。

誤解を承知で言い切れば、雑踏の中へと投げ捨てられた音楽が yumbo の音楽ではないかと思う。それがどういいうものかと言えば、残酷をオブラートで包み、飲みやすいように、食べやすいようににしたものである。『鬼火』の「悲しきマグロ」の冒頭の言葉を引用させていただく。

形は地上で
あきらめている
闇の終わりの日に
曇った空から
投げ棄てられた
宇宙を取り囲んでいる
このザクロのように
赤く裂けた夜明けの
底に座り込み
何も見なかったような気持ちで
マグロをお食べよ

前出の詩誌『回生』に掲載された「悲しきマグロ(イントロ)」の言葉は「形を守ることをあきらめて／耳を澄ませば／世界の終わりの／忘れてしまいうすです」と始まる。そう考えると、yumbo の音楽は、世界の終末を告げる、あるいはすでに終末を終えた世界に鳴り渡る響きではないかという穿った見方をしたくなる。

最後に、yumbo の音楽の大切な要素として、歌詞がある。残酷性は歌詞の中に込められている。これまでここで書いてきたことが一つの例ではあるが、しかし、歌詞が何かを語っているかというところ、あまり多くのことは語っていないと思う。さほどメッセージ性があるとは、担保をした言い方をさせてもらえば、今の時点で、さ程には思っていない。メッセージ性という言葉は、言葉の印象度という意味で使っているのだが、その点では、yumbo の歌詞は至極、穏やかである。強い明瞭な印象に残る言葉を使っているのではない。それが、意図的であるかないかは別として、日本語で語られる、あるいは唄われる声に、文字で書かれている情報を、ほぼ同じように伝えることは、不可能だと私は思っている。歌詞カードなど、文字で歌詞が書かれているものを読まない限り、通常の音楽の時間の流れでは、到底、歌詞の全体を知ることとは不可能である。それは、yumbo だけに限らず、日本語で唄われるどんな音楽でも大体が同じだと考える。日本語は音だけでは容易に理解できない言葉だと思っている。yumbo の音楽は、完全にそれを逆手にとっていると思うのは私だけだろうか。

▲2017/04/29 夜、句帳の表書きの印刷。アタナのペイビーで。十二ポと五号の組版、横十二ポ全角で三文字分を五号活字で埋めるのに、五号全角＋トタンでピッタリと合う。10.5P+13.1P=11.81Pで十二ポと約0.2(0.06ミリ程度)の誤差があるがその程度なら、大丈夫ということか。

▲2017/05/03 未明。活版印刷のワークショップのチラシづくりを、気が進まないが行う。マルの散歩。日中、小滝そばを食べに家族で出掛ける。帰路、狸森焙煎所で珈琲の淹れ方を実地に店主に見せていただく。豆の粗さと、そのお湯での蒸らし方が独特。夕、禁酒。今日も良寛。

輪のじれったい話をテレビで見よう。藤森照信『近代日本の洋風建築 開化篇』(筑摩書房)を昼、夜と読む。久しぶりに文字を読む。

▲2017/06/24 佐藤洋子氏から詩集『海の落とし子たち』(砂子屋書房)が送られてくる。ハードカバーの無線綴じの詩集。カバーの文字は空押し。活字で詩集の題名と作者名が印刷されている。一号活字と三号活字。できれば発行元の字も活字にして欲しかった。

藤森照信『近代日本の洋風建築 開化篇』。

▲2017/06/25 朝食後、塩釜へ妻と出発。最初に壺番館で映画を見る。『この世界の片隅で』。映画を妻と見るのは、あれ以来。見終わった後、互いに感想を言い合うことは、なかった。鹽竈神社に参拝、亘理でイチゴを買い損ねて帰る。就寝前、藤森照信『近代日本の洋風建築 開化篇』。

▲2017/07/02 午後、活版印刷のワークショップ。反省として、内容を明確にする必要がある(手順を学ぶのか、印刷だけしたいのか)。やはり、出張してのワークショップは、難しい。

▲2017/07/15 活版 TOKYO 2017 を見に行く。五号全角の木インテル(二四文字)の束と、同じ二分の束を買う。他に、ジャッキの締め具と十二ポイントの「@」活字。あとは、五センチ程度の大きさの木活字を KOGUWA の文字を買う。「W」は「M」だと思って買った。失敗。若い女の子が多かった。みんな可愛いという印象を活版印刷に持つのだろうか。それと、昔のものへの憧れかな。文字としての活版活字の良さというよりも、格好良いデザインとして惹かれるものがあるのだと思う。そういう意味では木活字によるタイポグラフィは面白いかもしれない。ただ金属活字で文字を印刷しただけでは魅力はないようだ。その後、古本屋街を散策、疲れたので帰る。

▲2017/07/22 義父の歌集のための和紙の裁断。印刷は来週になりそう。

▲2017/07/23 詩誌『霧笛』第二十二号拝受。

▲2017/07/29 食事後、義父の歌集の印刷に入る。昼を挟み、夕方までかかる。十一部を刷って、版で六枚。テキン快調。白樺のテッポウムシの駆除作業。すでに葉が枯れているので、もう間に合わないのかもしれない。

▲2017/05/04 小田原(仙台の)にあるブックカフェ「メアリーコリン」に行く。

▲2017/05/12 金子氏より村上善男のエッセイのコピーが届く。内川吉男↓村上善男↓尾形竜之助↓秋元潔↓活字↓矢立出版という繋がりはなんとも奇遇。

▲2017/05/26 午後七時から千田氏主催の「哲学カフェ」なるものに参加。最近、あちこちで行われている「哲学カフェ」の一つのやり方を知る。最後に八問いVを一つ立てて持ち帰るというところで八哲学Vと自分の中では結びつく。そこが、自分には難しい。参加者が話を出し合って(議論して)、作り上げてゆく問いなのだろうか。かなり個人的な体験から参加者が共通に持ち帰る八問いVは、選択(消去)なのか、抽象(具象)なのか。いずれにしても、自分にとっては「月は飽きない」という言葉で満足感を得られる。首の痛み、やや強くなる。

▲2017/05/27 午前0時を回り、NHK ラジオ深夜便で佐藤愛子のインタビューを聞く。先日、読書会での小笠原ひろみ氏の話(サトウハチローのこと)があったので、興味深く聴いた。サトウハチローと佐藤愛子のやりとりは異母の関係でも、兄妹としての普通の意識であったような物言いに面白さを感じる。

▲2017/06/03 義父の歌集の文選を開始。

▲2017/06/05 終日、体調が良い。体が軽い。昨年刷ったロボットカードを重ねて、ZINE にしようと考えて。帰宅後、現物を確認、あとは表紙をどうするか、文字をどうするか。『初心者のための欧文活字と設備』を読み続ける、再々読が続く。

▲2017/06/08 帰宅後、禁酒。楽天の試合をテレビで見ている。能天気。『ROBOT CARD BOOK』の構想を少々。楽しいかな。寝床で、良寛。

▲2017/06/10 ZINE の表紙と裏表紙を組版して印刷。文字を一字、案の定脱字する。

▲2017/06/18 ART ZINE の製作、最終段階の糊付け作業。思いの外、早く終わる。その後、タマネギの収穫。さらにその後、ただ呆然と過ごす。午睡。夕、日本酒をこちそうになる。早寝と思いきや、ケイリンと東京五

▲2017/07/30 解版作業終わる。

▲2017/08/01 未明。義父の歌集のあどろきの文選作業。

▲2017/08/05 未明。不眠っぽい。今日の印刷作業を確認するも、今ひとつやる気が起きない。そもそも眠い、けれど眠れない。世界陸上を見るも、ボルト攻めに逢う。午前二時頃、再び床につく。明るくなり、起きる。マルと散歩。いつもの中島踏切を通り、白石川土手、河川敷をウロウロして帰る(今日も、お繁のおやじに逢う)。三キロと二百メートル、一時間七分、キロ平均二十分五十六秒。朝食前、義父の歌集の最後の印刷作業の準備を始める。最初に印刷する中表紙の組版。朝食後、車を修理のためにディーラーに預け、代車で帰り、歌集の印刷。結局、午後三時に終わる。三版を刷る。最後に、名刺を約十枚。テキンの圧が高くなっている。気温が高くなって、微妙に圧が変化したのかもしれない。胴張を一枚剥がすことも必要だったのか、それともストッパーの位置をずらせばよかったのか。還暦記念の同窓会の案内、詩誌『「プロ共和国」 vol.21 拝受、cyg の ZINE 展』のカタログ等。

▲2017/08/11 未明に起きる。世界陸上。その後、義父の歌集の表紙の糊付け、半分の枚数を終える。そのままマルと散歩、雨が降っているがさほどではない。服装も通常。山崎公園を折り返し、原前公園を遠回り、ファミマを過ぎて帰宅。二キロと六百七十メートル、五三分、キロ平均二十分。朝食後、墓の掃除。繁昌院で卒塔婆を受け取る。盆の品物を少々買う。その後、残りの表紙の糊付け。金属の野線届く、飾り野が結構な値。夕方、走る、スピードランに挑む、六キロと百五十メートル、キロ平均五分四七秒、心拍数平均一五四、スピードランの割には心拍数が低い。cyg より、追納の連絡あり。ジンジャー泡盛で寝る。

▲2017/08/12 未明。義父の歌集の仮綴じ作業。マルと散歩、雨がけっこう強いので、原前公園に向かい、直滑降で帰る、約十五分。朝食後、義父の歌集の端布を付ける。それ終わり、朝食。親戚廻り。本家は不在、あとはカツオちゃん家と沼辺へ。帰ってから、昼食後、ROBOT ZINE CARD つくり。紙を切って、印刷。午後、全部費やす。

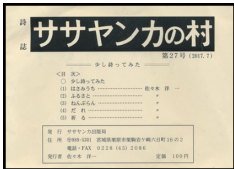
▲2017/08/17 また未明。世界陸上を見ながら、ZINE 『ROBOT CARD

ZINE』の小口とのどをカッターで揃える作業、あまり上手にできない。紙切りはむずかしい。マルと散歩、二キロと三百二十メートル、五十分、キロ二分のペース、原前霊園をぐるりと廻るいつもの経路、霧雨に濡れる。独りで朝食、その後、寝る。起きて、本家へお盆のお参り、しばらく談笑。帰ってきて、昼食。『ROBOT CARD ZINE』の裏表紙と背表紙への文字の印刷を忘れていたので、開始、なかなか上手にできない。見当の要領が駄目、2冊失敗となる。その次に、義父の歌集の正誤表の組版。それをやっているうちに、「ToDo List」を作りたくなり、組版をしよう、というか楽しい。夕方までかかるも、印刷まで完了。罫線の組版は楽しい。夜、ジンジャー泡盛で寝る。

▲2017/0816 寝る前、栗田勇「芭蕉」(祥伝社)を読む、なかなか進まず。
▲2017/0817 午前四時過ぎ、残りの解版作業。それを終え、マルと散歩、雨の中、十五分くらいで最短距離を進む。朝食後、益棚をかたづけ。午前十時前、母を病院に連れて行く。診察、検査の結果は、脱臼。大きな病院を紹介され、そこで外れた骨を肩に入れる。終了、午後三時。それから昼食。この日は待合室ですっと栗田勇「芭蕉」(上)を読み続ける。面白くなる。これは詩論です。その後、義父の歌集の正誤表と表題を印刷。それ終わり、走る。四日連続走るが、結構身体に負担が出ている。
▲2017/0818 未明。義父の歌集『挽歌』の編綴作業、まず一冊を綴じる。
▲2017/0821 竹内英典氏から詩集『歩くひとの声』(落標) 拝受。でも、二冊も来てしまう。何かの間違いなのではないか。
▲2017/0826 喫茶ホルンのシヨップカード印刷。
▲2017/0830 栗田勇「芭蕉」。いままで難解という言葉を誤解していたようだ。それは曖昧ということらしい。
▲2017/0903 帰宅後、風呂に入る。朝食を終え、珈琲を飲んでから、畑仕事に入る。百均で種を買う。小松菜、水菜、チンゲンサイ、二十日大根、白菜、レタス菜等を買求め、ケヨーD2で腐葉土と鶏糞を調達。黒川号で畑を掘り起こし、石灰を撒いて、畦を作り、植える(二十日大根は植えず)。午前中に終わる。午後、妻の為に「ToDo List」を印刷、クラフト紙にメモ書き用の枠を広げ(飾り罫線で)印刷。約百部。夕、十キロ程度

とを真正面から取り上げたものではなかった。とにかく、内陸部に住んでいる自分には、震災のことを語る資格はないと思っている。それは、今でも、である。

前書きが長くなったが、詩人佐々木洋一の詩誌「ササヤンカの村」第二十七号のあいさつ文「少し詩ってみた」を読んでいる、



佐々木洋一氏は、あいさつ文で、「東日本震災から六年が過ぎた。ここにきて、その痛みがどこからかムクリと顔をもたげる時がある。やっ、と、詩(作品)に描いても許されるような気がする。」と書いている。

佐々木洋一自身が佐々木洋一自身に蓋をしていた箍を外してもいいだろうと語っていると理解できる。確か、佐々木洋一は震災の詩を自分は書かないという意味にも取れることをどこかに書いていたと記憶する。佐々木洋一氏は、被害の大きかった沿岸部に住んでいた時期があったので、知人友人が多く居ただろうし、他人事ではなかったはずである。しかし、身体の中に生じてくる思いを詩の言葉にすることを許してこなかった。言葉にできなかったということではなく、敢えて許さなかったのだ。

ここにきてどうして許す気持ちになったのか、それが気になった。色んな言葉が浮かんで消え、心の奥底に残っている言葉はきつとあるだろうけど、八詩に描くことは許してはこなかったということである。八詩に書くことは書かず、八詩に描くことは書いていない。八書く八描くとは何が違うのだろうか。

ここで私が一人で勝手に解釈をあだこうだと巡らしても、これ以上はもう無駄なことであるので、この第二十七号に書かれている詩を読んでゆこう。

汚点のようになってんとう虫が一瞬翅を十字架のように広げ

走る。本当はハーフを走ろうとしたが、いつものコースで終える。ゆつくりとしたペースも、途中で先を走る人を見つけ、追い越そうと頑張ってしまった。夜、日曜美術館で小さな日本家屋を見る。思うところあり。でも、今は動くときではない。栗田勇「芭蕉」。

▲2017/0904 帰路、「源氏」で高清水初しほり二杯。家に帰っても、収まらず、赤ワインの封を解いてしまう。栗田勇「芭蕉」。

▲2017/0909 朝食後、句帳の編綴作業を終える。重しを付けて、平らにする。その後、菅生の布袋農園へ。珈琲を飲みながら、しばらく佐々木洋一氏の詩誌「ササヤンカの村」第二十七号のことを記す。

▲2017/0909 今年(二〇一七年)の夏前に気仙沼に行き、詩誌『霧笛』の千田基嗣氏が主催する「哲学カフェ」に参加させていただいた。この頃、ネットなどで度々目にする「哲学カフェ」なるものが、どんなことをするものなのか興味があった。

千田氏が、自分の詩集『湾Ⅲ』から幾篇かの詩を奥様と朗読し、それをきっかけにして皆が、ある程度のルールの下、自由に話し始めた。千田氏の詩集『湾Ⅲ』は、東日本大震災が起きた直後の気仙沼の街の風景を描いたもので、語られる内容は震災のことに集中した。十人ほどの参加者のほとんどは気仙沼の方だったので、ある人が被災した直後の体験談を語れば、違う人がその話を引き継いで、自分の体験を話すという流れで、時間が過ぎていった。

その中でこんなことを話した人がいた。「さほど被害のなかった内陸の人が、自分は震災でさほどの被災はしていないから 震災の話をするのが憚れる。」という内容だった。その話がどういう経緯で、この場で語られ、次の人にどのように引き継がれていったのか、私は覚えていないけれど、私自身も「震災のことを話すことが憚れる」思いであり、まったく同じだと発言した。

私は、東日本大震災に関連した詩を版画家竹林嘉子女士との詩画作品の共同制作で幾篇か書いている。それは、竹林女士の版画に寄り添った言葉で、震災に自分が向き合ったものではない。その他に自分の体験を書いたものは一編だけあるが、それとて主題は自分自身のことであり、震災のこ

飛び出す
天と地の落差

詩『落差』全篇

深読みすると、「汚点のように」「十字架のような」という単語は、象徴的に感じる。つまり、何かを象徴(描写)しているような表現に感じられる。具体的に言葉を使って何を描こうとしているのか、そのことはあまり重要ではない。大事な点は、描こうとしている主体の意思が、そこに感じられるということである。前に書いたあいさつ文を読むと、どうも気になるが、これ以上詮索しても、面白くなるばかりなので、この詩のことでは、佐々木洋一氏の中で八詩に描くことを許している何かがあるということ留めておきたい。ただ、それを作作的に感じてしまうのは私だけだろうか。

この詩の前書きに、「少し詩ってみた。」と書かれている。この八詩って八詩に描くと同じ行為のことなのだろうなと思う。佐々木洋一氏の詩は、音を楽しんでいる節がある。初期詩編を読むと、それは如実に体験できると思う。今現在でも言葉はリズムミカルであり、節回しがある。でも、どこか頭で考えている気配もある。

この詩『落差』の後、第二十七号では『ささみうち』、『ふるさと』、『ねんぶらん』、『だれ』、『祈る』と五篇の詩が掲載されている。それぞれの作品を読んで、私の中に生じる思いを言葉にすることは、もうこれ以上根気が続けないので終わる。そして、冒頭に書いたことでも十分だという思いがしてきで止めにするが、ササヤンカ村にも何か余所から風が吹いてきているのかもしれない。風が吹くためには、違いが必要である。暖かな場所と寒い場所、高い場所と低い場所、さまざまな場所に、さまざまな落差があるということなのだろう。それは、許すとか、許さないという主観的な言葉が一切通用しないことなのだろうと思う。突き詰めれば、八描くとは、主観的な行為ではないのだろう。だから客体もないのであるが、時間の経過で変わるものでもない気がする。

ひとり居 秋網まさお

いただいた金魚鉢の金魚
くいくい身を翻す
巧みな交差
と いうのだろうか
透けるテレビの映像をはねのけ
投げ込まれる音声が
寸断される
脈絡のすぼんだ
私たちの
やり取りみたい
逃げ水にやり込められた
名もない残像にも

時はやさしく付着する

たとえば、マトリョーシカの
しかし
侵しがたい微風
が 絶えた
無いことは
風のように舞う
肌触りを残し
引き裂かれた
在ることの端緒を尋ね
物音までも吸い尽くした
間接空間を漂う
とげとげしい静寂に張り付いている
忘れ物

十月六日について 小熊昭広

わたしの家に

隠れてやって来た人がいました

電話をかけてきて

今、近くまで来ています

ここから先をどう行けばよいですか

と、聞いてきます

そこに何か目印になるものがありますか

原前霊園というところにいます

ならば、そこを出て左に曲がって

用水路の脇の道路を直進してください

わたしは外に出て待っています

そんなやりとりがあって

わたしの家にやって来たその人は

礼儀正しく、営業を始めました

とても人当たりの良い人で

話が弾みます

わたしが淹れた珈琲も飲んでくれました

紙を開発して売っている会社です

活版印刷のとても良い紙がありますから

是非、活用してくださいと言われました

けれど、卸の会社を通してでないと

その紙を手に入れることはできないようです

結局、紙を買うことはできませんでした

どこか個人と取引してくれる

卸の会社を捜してみますね

ということになり、話は終わりました

わたしが持っている活版印刷の機械や道具を

楽しそうに見てくれました

会社に帰った彼はいなくなりました

からくり箱 小熊昭広

まるで

からくり箱の中にいるようです

この糸に触れると

お日様が九十度に曲がります

すると、影がわたしの身体からだの半分を横切ります

握った手や内臓を通過するのです

三つ編みの女の子が

白いブラウスを着ています

三角の心臓とデニムの膝小僧が丸見えです

あっちの糸に触れると

窓が開いて

ヒヨドリが鳴きます

キーキーと甲高い声がするので

家の人が起きてきました

彼は眠い目を擦りながら現れたものですから

泥だらけになった気分です

絡みあっている

その先端は何処どこにあるのか判るのですが

それが始まりなのか終わりなのかわかりません

どちらでもよいのです

辿ってゆくとカラカラと音が鳴ります

いや、もしかしてぐるりと繋がっているのでしょうか

赤い糸を見つけてしまったのかもしれない

輪廻でしょうか

昼寝していた顔に

人の足が乗り移ります

踏みつけられてキーキーと身体からだから

湯気が吹き出るのが見えています

いつの間にか彼女は服を着替えて厚着をしているのです

ダルマさんから生え出た手足の糸です

箱の中の生活を

わたしはどうやって過ごしたら良いのでしょうか

鳥になって空を飛べたとしても

すぐに天井にぶつかるとばかりです

ぐるぐると果ての無い世界を回るしかないのでしょうか

例えば屈折した心を振り払ったとしても

重しを糸に繋いで引き下ろしているだけなのです

わたしの運命は

からくり箱の中で横顔になっています



とても質素ですが、芸術の香りの溢れる素敵な空間です。定禅寺通りに面するビルの奥にひっそりとお店がありますので、静かな時間を過ごすのに最適な喫茶店です。

喫茶

ホルン

仙台市青葉区立町の喫茶ホルンです。フレンチプレスで抽出するスペシャルティ珈琲や南インドカレーなどをお出ししています。

営業時間 火曜～日曜 11:00～19:00
(月曜定休)

所在地 〒980-0822
宮城県仙台市青葉区立町26-17-202
(定禅寺通り・せんだいメディアテーク向かいの甘栗屋さんの2Fです)

電話 022-711-5520
Twitter : @kissahorn
URL : <http://kissahorn.blogspot.com/>

!!! ランチプレートを始めました!!!

お昼の午後12時～午後2時は南インドカレーのランチプレートもあります。ドリンクも150～200円プラスでオーダーできるお得なサービスです。

●寄稿者住所

やまうちあつし	宮城県名取市増田一丁目13-18-10
秋網まさお	宮城県仙台市青葉区葉山町3-5-201
金子忠政	宮城県白石市福岡長袋字永坂15の1
前沢ひとみ	宮城県富谷市 (在住)

ランダム・メモリー

■自分が行っていることは、それほど価値のあることではないということを忘れてしまっています。例えば、お金をもらったりするっていい気になって、「これは私がしたことですよ。」などと他人に言ってしまったります。本当は、ただ手持ち無沙汰な時間を過ごしているだけなのです。結果があるだけで、それ以上でも、それ以下でもないのでは、と思います。それは、風に乗ってどこからか種が飛んできて、自分の（と勘違いしている）庭に、いつの間にか見慣れない（と自分だけが思っている）草が生えているだけのことです。この頃、頻繁にそんな勘違いをしている気がします。

■詩誌「回生」（通巻四十号）をお届けします。根無し草のような、根拠のない雑誌ですが、御笑読いただければ幸いです。

■詩は、勘違いの最たるものではないかと思えます。そもそも言葉自体が、とても曖昧なものです。それが、文字となって、さらに活字となって世の中に出てゆくと、もう何が何やら分からなくなります。そもそも言葉というものは、そういうものだと思えます。ですから、言葉で断定をする時には、頭の中ではそれを否定しておくことが大切になるのではないのでしょうか。ましてや「絶対・・・」とか、「・・・しなければならぬ」とか、「みなさん・・・しましょう」という言葉が飛んでいるときには、注意が必要です。

■今号も、金子氏、前沢氏、やまうち氏、秋網氏から作品を寄稿していただきました。感謝申し上げます。

■中村氏には、時間のないところ、無理を言って作品を仕上げてもらいました。

■小熊は、この約半年、頭の中は活版印刷のことばかりです。本来、活版印刷はなるべく凹凸を出さないで、くっきりと文字を判読できるように仕上げるのが、よい印刷の技術とされてきました。今の時代、それを行うと簡単に組版を作れて、早くて安価な印刷ができるデジタル印刷との違いがほとんど無くなります。当然にデジタル印刷の方が便利です。結果、活版印刷の良さは凹凸があるこのみになっってしまう。文選、植字、組版、ゲラ印刷、ムラ消し、印刷、解版といった一連の活版印刷の面倒な作業に価値を見出すことは困難です。また、価値の話に戻ってしまいましたが、価値がないことに夢中となっている自分が、そこに価値を求めているというへんてこりんな構図となっています。

■今後も、表紙画は明才さんをお願いしました。時間の無いところ素早く仕上げていただきました。ありがとっございました。（熊）

詩誌「回生」第ゆ号（通巻第四十号）

発行 二〇一七年十一月一日

編集 小熊昭広

表紙画 明才

発行者

中村正秋（なかもら・まさあき）

〒371-0103 群馬県前橋市富士見町小暮

2225-15 tel 0272-88-9073

gcom@garagecom.jp

小熊昭広（くぐま・あきひろ）

〒989-1201 宮城県柴田郡大河原町大

谷字原前 50-5 tel 090-5230

-2349

kaisei@poetic.jp

Twitter @snishikaiei

発行所 快晴出版

定価 フリー（時価）